

ホトトギス

昭和二十四年三月二十八日運輸省特別換承認証第六二七号  
平成二十二年五月一日発行(第四百十四卷第五号)

# ホトトギス

五月号



## 俳句随想 〔三百四十七〕

汀子

「朝日俳壇（二月七日） 稲畑汀子選について基本的な疑問を指摘する」という投書を朝日新聞社に頂いた。〈臘梅や一輪に呼び止められて〉という句について「一輪に呼び止められた」という浮ついた擬人法。従って間投助詞の「や」が語調を調える、あるいは「臘梅」に焦点をかたちづくる機能を果していない。「や」で切れて、「一輪」は「一輪車」となる。意味が続くときは切らないで一句の空間の広がり詠うのが俳句の基本、とある。

おそらく投稿子は国語の先生であろう。「や」を間投助詞の「や」としか考えていない。しかしこの場合「や」は俳句の「切字」である。その発生時はおそらく「切字」の「や」として確立した時点から、「や」はその前の語で統辞軸上の流れを一旦切断し、そのことで連想軸の働きを刺戟しながら、しかも「や」以下に上の意味を潜在的に伝達するという、俳諧が生み出した表現上の大発明なのである。

「切字」のこの重要な働きを理解しない人は、〈古池や蛙飛び込む水の音〉の一句について、古池で切れているから、蛙は隅田川に飛び込んだなどとはんでもないことを言うのである。尚「一輪に呼び止められて」が浮ついた擬人法というのは投稿子の感じ方であって、私は適切な表現であり擬人法だと思う。

旬日記

汀子

平成二十二年五月一日 芦屋ホトギス会

行春の心が先に動き出す  
もう帰り来ぬ魂よ春の行く  
人も又藤も不順に耐へしかと

五月二日 下萌句会

余花一樹出逢ひといふは突然に  
惜春や庭師の怪我もほぼ治り  
風の午後命戻りぬ鯉轆

追悼文書き惜春の思ひ切

五月三日 ロイヤル俳壇

皆胸に抱く惜春の情として  
惜春の想ひ重なりゆく無情  
シャンデリア軽暖の街逃れ来て

五月八日 四国ホトギス同人会

線香の匂ひ届かぬ花みかん  
風五月虚子のふるさと訪ふ日かな  
桐の花忘れし頃に桐の花

五月九日 四国ホトギス俳句大会

順路とて迷路や汗の行き止まり  
講演の構想半ば伊予の夏  
迫り来し色の邂逅桐の花

五月十日 悼 桑田永子様

万緑の庭に面影追ふばかり  
五月十一日 大阪倶楽部

馴染みたる古茶の暮しを変へざりし

講演の一つ終へ来し風五月  
卯浪越え来たる旅路の大橋に  
古茶淹れて変らぬ生活ありしこと  
帰路昏れて気配とてなし桐の花

五月十一日 綿業倶楽部

更衣して旅心ととのふる  
期待より見事な余花でありしこと  
更衣急ぎ後悔すること  
表情も更衣してをりにけり

五月十三日 清交社

咲き終へし牡丹に月日とどまらず  
篝火燃えし日本の闇へだて  
明日は又薄暑に惑ふ旅衣

軽暖の晴よろこびて旅二日  
往復は六百料の新樹晴

五月十四日 工業倶楽部

新樹晴旅の二日はまたたく間  
五月十四日 「冬野」一千号

おそ霜の東京発ちて祝の地へ  
五月十八日 有恒倶楽部

一瞬の富士を見し旅夏霞  
書き上げて自由な手足若楓  
マロニエの花の消息語らばや

透ける色風を捉へし若楓  
東京に滞在三日初鯉

五月十八日 無名会

ここよりは山深くなる桐の花  
牡丹に華やぐ玻璃の一とこ  
鯉轆消えてをりたるたみ皺

やうやくに初夏の陽気のととのひ来  
歳月の消えて久しき白牡丹

旅の間に咲きし牡丹のあることを

剪るに惜しとて牡丹に雨至る  
子育ての頃はや遠し鯉轆  
五月十九日 夏潮句会

二階から見て下さいと朴の花  
青芝に消えて雨音なりしかな  
どの部屋も庭の緑に包まるる

マロニエの花に一番近き窓  
雨音を聞き万緑の庭に出ず

五月二十日 クラブ合同

山荘はわがまほろばよ時鳥  
着々とこつこつと稿時鳥  
麦飯の麦の少なきこと気づく

存在をひそめたるより葉桜に  
葉桜の影を貫ひて通りけり

五月二十一日 時雨句会

業平忌ゆかりの芦屋住み古りぬ  
こつこつと稿債仕上げ業平忌

五月二十一日 句会と講演の会

初夏の花活け壇上に迎へたる  
このあとも編集会議花茨

五月二十六日 辻千緑 順子様句集

短夜を励み来られし日々ありて  
五月二十七日 きさらぎ会

牡丹散るときに忽ちなりしかな  
雨上り初夏の日差の戻り来し

牡丹に雨の狼籍見るばかり  
萎えたるは艶とも見ゆれ紅牡丹

くづはれる市の牡丹となりゆけり  
五月三十日 たつの市民俳句大会

九十九折新樹明るき一とこ  
人悼む心持ち寄る新樹晴  
百寿超えなほ豊饒と涼しさよ

# 廣太郎句帳

廣太郎

平成二十二年五月二日 野分會音屋例会

吹流し 未来へと向く九十度  
吹流し 屋根より低き旧家かな  
マーガレット咲けば阪神首位に立つ  
富士を向く車窓に飛べる吹流し

五月三日 虚子記念文学館投句

十年てふ館の未来へ卯浪寄す

五月六日 蕉心会

子等遠く飾胃の日も遠く  
人惚ぶ心に集ひ葉の日  
翻る時日を弾く金魚かな  
あの橋の先は卯浪を寄せる色  
汗引いてより下町の景に入る  
茂りつつ人を寄せつつ館活気  
百二十二回目句座風薫る  
薫風と猫鯉節取り合へり

五月七日 カトリック新聞選者吟

葬儀ミサ人悼み春惜みけり

五月八、九日 四国ホトギス同人会 大会

雲海の上に富士あり飛機のあり

日傘差す皆マドンナになり切つて  
ミシユランの一つ星とや寺薄暑  
緑蔭を翻したる鐘一打  
麗人を集め明るき木下闇  
江戸と伊予一直線の夏霞  
余花に会ふてふ父祖の地の縁かな  
歩きても歩きても城薄暑かな  
夜は星と語る天守の灯涼し

五月十日 朝日カルチャー若草句会

新樹より升さんの現れさうな城  
葉狩吉野の空を傾けても  
葉の日酒控へると言はれても  
新樹晴俳句興りし国の城

五月十三日 土筆会

出会とは俳句生れし国の余花  
夏めいて名園何んも咲いてへん  
卯浪寄す港イージス艦の黙  
一輪の余花に視界の開けゆく  
繭数多芥のごとく流れゆく

五月十八日 草木瓜会

薫風の繋いでゆきし鐵路かな  
薫風に包まれてある梨畑  
薫る空路は西の賀へ続く  
郊外といふ風薫る出会かな  
古茶好む昔気質の翁かな  
稻城野の空を広げて風薫る

五月二十日 登高会

パースデープレゼントカラーイエロー  
飛魚の宇宙目指してゐるやうな  
海芋先づ目に飛び込んでくる事務所  
軒草蒲十六代目生れし家  
白楚々と黄は爛々と海芋咲く  
その中に何かが動き海芋咲く

五月二十一日 ホトギス社句会

招かざる客の羽音も夏座敷  
花茨棘持つ人にばかり惚れ  
五月二十三日 野分會東京例会

五月二十五日 若水句会

子等の声マーガレットの丈揺らす  
マーガレット群れたがる虫群れたがる  
新樹晴戦禍忘れてゐるやうな  
糸取の昔を語る太柱  
鈍色の糸取鍋にある憂ひ  
ビル風といふ新樹の香ありにけり  
海亀のシテの如くに消えゆけり

五月二十六日 目黒学園句会

初鯉味は如何と言はれても  
鍬先が笥山を知り尽す  
袋掛されて稻城の空の色  
初鯉東下りも三十年に  
突 鍬に笥山の裏返る

五月二十七日 能登ホトギス探勝会七百号記念大会

句碑の文字明かされてゆく薄暑かな  
これよりの句碑の未来へ風薫る

# 雑詠

## 廣太郎 選

拝殿の闇に雪降る初詣 樞原 稲岡 長  
 初夢はかなしきことをなつかしく 同  
 覚めてなほ貌が初夢喰うてゆく 同  
 マウイとは花の楽園風涼し 東京 川口利夫  
 眠りたる椰子の浜辺の星月夜 同  
 虹に逢ひ虹に別れし出合ひかな 同  
 あらたまの年の覚悟ぞ屠蘇気分 神戸 山西商平  
 子規虚碧鳴雪も居る初暦 同  
 許されよこの酔ひはまだ松の内 同  
 餅を搗く音とは凹むときの音 神戸 後藤立夫  
 お年玉袋大中小のあり 同  
 干菜とて日差のいらぬ色となる 同  
 諷詠の心は枯れず菊枯るゝ 福山 竹下陶子  
 故国恋ひ戦ひし日の時雨かな 同  
 虚子句碑に土佐の秋声おのづから 同  
 知事賞黄市長賞白菊花展 吹田 大橋 暁  
 日と風に身を任せたる破れ蓮 同  
 かくまでの濃き白はなし富士の雪 同

ご案内雨の紅葉もよからずや たつの 浅井青陽子  
 清らかな眼には見えぬて寒の星 同  
 戻りて影の消えたる寒牡丹 同  
 大琵琶といふ盃に初日満つ 奈良 古賀しぐれ  
 万葉のほひちりぬる歌かるた 同  
 沈黙は金寒紅は真くれなゐ 同  
 鴉翔ち一塊の雪落ちにけり 東京 大久保白村  
 泰然と朝富士凍りつく湖面 同  
 風花や雲は変幻富士不動 同  
 峰寺の何処からとなき隙間風 京都 安原 葉  
 建替ふる気もなき老や隙間風 同  
 隠れ住む庵にも馴れし隙間風 同  
 冬木の芽ほどの希望を力とし 神戸 山田佳乃  
 炊出しの人を集めてゐる焚火 同  
 湯豆腐の白の揺れたる丹波焼 同  
 み吉野を無音に沈め霜夜かな 同  
 草木の月日燃えゆく庭焚火 同  
 咳といふ言葉にならぬ言葉かな 同  
 リスト弾く第一音にある淑気 同  
 俳磚の藍文字にある淑気かな 同  
 初ミサの聖堂に満つ淑気かな 同  
 ふくらめる町の教会クリスマス 龍ヶ崎 今橋真理子  
 灯ともりて聖樹の鼓動始まりぬ 同  
 古暦かしく数日残しつつ 同

# 雑詠句評（四月号より）

比奈夫・昭代・雅  
一歩・純也・暮潮  
佳乃・くに彦・仁義  
しげ人・廣太郎

## 大根の葉のおいしさうなるを買ふ 熱海 嶋田摩耶子

料理のことはよく知らないのだが、この旬大根を買うと言うのは市場など店頭に並んでいる綺麗な大根を買うときのことであろう。葉を調理に使うなら葉のおいしさうなるを買えばよいのだけれど、それでは俳句にはならない。同じようにおいしそうに並んでいる大根のよさを判定するのに、作者は葉のしつかりしたのを選ぶというのである。大根の葉を見て、大根そのもののおいしさが分かるのは立派な主婦の目であると思う。（比奈夫）  
スーパーに売っている「大根」は、殆どが葉の付いていない状

態ではないだろうか。それでも最近はこの葉にたつぷりと栄養がある事から、葉付大根が見直されてきたと聞く。その栄養価の高い葉の方に着目した事により、本来の大根の全体像が視覚的にも伝わってきて面白い。（廣太郎）

## 大根と水と清々しく出合ふ 淡川 山本素竹

一読、先ず大根を切った時の水の送るみずみずしさを連想したが、「出合ふ」と言うには相応しくない。矢張り畑から抜いたばかりの泥のついた大根を傍らの小流れで洗っている情景の実感であろう。美しい山水に洗われ、一変して輝かしい純白の大根となつてゆく。その時の見紛うばかりの清々しき、美しさは水あつてこそその輝きであり大根と水が出合うとは何と斬新な描写であろう。

（昭代）

こちらにも「大根」であるが、直接目にする表現を超えて、何かこの大根の物語を垣間見ているようだ。種時きから始まって、野菜として土の中で育ち、収穫期に引かれ、そして洗われる為にここで今「水」と出合うのだ。とここまで読んでみると、やはり季節としては「大根洗ふ」であろうか。（廣太郎）

（以下略）

# 天地有情

# 花子選

顔見世のはねて夜だけ残りたる  
冬の芽に初学のころありにけり  
初雪といふ熱きもの降る夜かな  
初雪や野は馥郁と鎮もれる  
星になるまで鷹舞うてをりにけり  
日本に鷹の空あり大地あり  
葛湯搔く父母と在りし日偲ぶる  
吹く風と残る木の葉と細き月  
海光に十字の窓や冬うらら  
島の墓地尽きて熔岩原小春風  
かはるなく二人居りけり去年今年  
納屋に咳ありしが居間に移りけり  
星の降る島よりクリスマスカード  
耳休め目休め指が毛糸編む  
たましひの遍歴やまず秋の風  
もれ易き老の泪や秋袷  
雪晴の明日を約して冷え急に  
立春のひかりあまねく屋根の雪

神戸 後藤立夫  
同  
同 長山あや  
同  
東京 稲畑廣太郎  
同  
京都 安原 葉  
同  
千葉 大木さつき  
同  
箕面 井上浩一郎  
同  
東京 今井千鶴子  
同  
福山 竹下陶子  
同  
同 稲岡 長  
同

小春とは水輪ひろがるごとくかな  
在天の神に捧げて濃紅葉  
大仏に見下ろされぬる淑気かな  
放談の会もて仕事始かな  
明星の輝きに去年今年なく  
旧年の誰彼をふと残る星  
楽しみは小春の嵯峨野人群れて  
敗荷も一つの景の嵯峨野なる  
大銀 杏 黄葉 青空 結願す  
水鳥を眺む無言に加はりて  
クリスマスキャロルスキップして来り  
武蔵野の空の揺れをり冬木立  
どれも手を抜けぬ予定や日短  
母の所作思ひ出しつつ春仕度  
冬日さす柵田の里は水豊か  
昼の膳河豚の話と戴きぬ  
囃されぬ金には遠き金鈴子  
虫籠の中胡瓜峨々茄子峨々

熊本 岩岡中正  
同  
神戸 三村純也  
同  
金沢 藤浦昭代  
同  
たつの 浅井青陽子  
同  
徳島 上崎暮潮  
同  
東京 河野美奇  
同  
宝塚 水田むつみ  
同  
吹田 宮崎 正  
同  
神戸 後藤比奈夫  
同

# 天地有情句評

汀子

吹く風と残る木の葉と細き月 京都 安原 葉

木枯に耐えている木の葉と織月。

海光に十字の窓や冬うらら 千葉 大木さつき

海光に光る窓の十字。

顔見世のはねて夜だけ残りたる 神戸 後藤立夫

余韻を曳く夜。

納屋に咳ありしが居間に移りけり 箕面 井上浩一郎

咳の足取りを捉えた作者の位置。

初雪といふ熱きもの降る夜かな 神戸 長山あや

初雪を熱きものと捉える感動。

耳休め目休め指が毛糸編む 東京 今井千鶴子

くつろぎの楽しみ。

星になるまで鷹舞うてをりにけり 東京 稲畑廣太郎

もれ易き老の泪や秋袷 福山 竹下陶子

遂に一番星が現れた鷹の空。

長老の証。